

# 仏教者としての私の学び

鶴見大学仏教文化研究所特別顧問

木村 清孝

皆さんこんにちは。ご紹介いただきました、木村でございます。今ご紹介にありましたように、本学とは深い縁がございます。現在はこの研究所の特別顧問としてお手伝いをさせていただいております。

ところで、本日の主題である東日本大震災には、私自身も、本場に大きな衝撃を受けました。そして、これをきっかけとして考えるところも多くございました。そこで今日は、まとめて皆さんに私の思いの数々をご紹介しますながら、改めてこの大震災について想起し、学びを新たにしていきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

さて、今日のお話を、お手元の資料集の中にあります、本学の「学報」に、山根明先生が書かれた記事から始めさせていただきます。山根先生は当時、本学の歯学部で物理学、数学等を教えておられた方ですが、この大震災の折に本学の学生たちが自発的に組織したボランティア活動をとて熱心に支援されました。残念なことに先生は、その数年後に、急に亡くなられました。本当に今も惜しまれるのですが、この記事は3回目の現地入りで、その頃学長であった私も同行させていただきました。

ちなみに、少し補足的なことを申し上げますと、以前の阪神淡路大震災の折にも、本学は学生さんたち呼びかけで支援活動を行いました。しかし、そのときには大学のほうが主体でした。けれども、東日本大震災のときには学生さんたちの中から出てきた声が具体的な組織にまで発展し、それを母体として何年にも渡って支援活動が続けられてきたということです。私は、今も本学の素晴らしさを表す事例の一つとして、このことを誇りに思っています。

もちろん、このようなボランティア活動は、簡単にうまくいくわけではありません。勝手に出かけて行って何か手伝いができるというものではないですね。受け入れる側とどのように調整し、どんな立場で何を手伝うのか、何を支援するのかきちんと決めた上で動かないと実効性はさほど上がりませんし、かえって迷惑になってしまうこともあります。また、学生さんたちを送った場合、何か事故があったらどうしようかとか、いろいろなことを合わせて考えなくてはなりません。そういった諸問題を、一つ一つ解決し、全体の調整を図りながら話をまとめ、大震災が起こりました二〇一一年の夏、冬、そして翌年の春と、主に大学が休みになる期間を活用し、有志らがボランティアとして活動するということを行ってわけでございます。これはその第3回目の活動の報告です。この時は、全部で27名になりました。しかもこのときには、記事にありますように、大妻女子大学と跡見学園女子大学の学生さんたちも参加してくださいました。大学は、いわば縦割り式で、それぞれの教育活動、研究活動を行うことが多いのですが、図らずも大震災をきっかけとするボランティア活動の中で、大学の枠を超えた学生さん同士の横のつながり、連携と友情が生まれたわけです。これからの教育・研究体制のあり方を考える上でも、貴重な経験を共有できたように思います。

ところで、資料の中の最初にあります数枚の写真は、本学の活動の中心をなす「まなびーば」と名付けられた、小學生を対象とする学習支援の一コマです。場所は、気仙沼にあります大谷小学校です。本学の関係者と小学校の校長先生がたまたま知り合いであったことがきっかけで、この小学校の校長先生を始めとする先生方のご理解とご協力の下で実現しました。要は、小学校が休みの間に、少しでもいろいろな不安やストレスを抱えながら休みを迎えた子どもたちの支えになり、かれらの心を慰められないかと考えて進めたわけです。小学校ですし、特に休みの期間ですから、楽しみながら学ぶ、学びながら楽しむ、その中で成長していくというあり方、まさに「よく学び、よく遊べ」を実践する中で子どもたちの安心と成長に何か手助けになればという思いで行ったものなのです。

なお、もう一枚の最後の所に出ております写真は、直接子どもたちとは関係ありませんが、ある歯科医院の前で

撮ったものです。この医院の先生は、たしか台湾ご出身の方だったと思いますが、歯科医師として、ボランティア的に被災者の方々の口内ケアに尽力しておられました。この先生にもいろいろ助けていただいたのですが、現地におられて、あまり報道されないような地味な活動で、被災者の方々を支えるという人たちもたくさんいらっしゃったことをぜひ思い起こしていただければ幸いです。

ともあれ、本学の「まなびーば」の活動はあくまで学生さんたち自身のボランティア精神を柱とし、大学側はこれを援助し、補佐するという形で進められました。その学生さんたちが、実は数年後、私が学長を退くときに、温かい気持ちに溢れた寄せ書きの色紙を贈ってくれました。子どもたちと一緒に、自然の樹に縄をぶら下げてブランコを作ったり、川辺で泥をかぶりながら一緒に遊んだりしたことなどとともに、ほんとうによい思い出です。

これまで申し上げてきたのは、私の小さな経験の一部です。これらの経験を介して、改めて深く考えさせられることがさまざまありました。総じていえば、今日の副題にございます「災害・いのち・こころ」にかかわる問題です。そのことについて、この後少しお話させていただきたいと思えます。

まず、一般的に我々が考える災害とはどういうものか、また仏教では災害をどう考えているのかという問題に触れておきます。災害は、大きく分ければ自然災害と人的災害の二つになりますね。かつては災害といえば、天災ということばが古くからあるように、ほとんどの場合、自然の災害を意味しました。けれども、文明が発展してくると、人的要素が関連する災害がどんどん増えてくる。人的災害と規定できるようなものまでが生まれてきます。今回の東日本大震災も、福島の原発事故に象徴されるように、かなりの部分が人的災害といえるでしょう。これまで人間が便利さを求め、豊かさを求めて進めてきた、その路線があったから起こった災害が少なくないのです。

もちろん、東日本大震災を引き起こしたのは地震であり、津波であることは確かです。しかし、その被害を増大さ

せ、長期化させたもの―このことを考えたら、いかに人的な要素がそれに深く関わっているかは明白です。こういった点を含めて、私どもは災害の問題を考えていかなければなりません。

では、仏教ではこの点をどう見るのか。仏教が起りましたのはほぼ二五百年前ですので、災害における人的要素への直接的な言及はほとんど見いだせません。そこで、視点をずらして、どのような宇宙観なり、自然観なり、あるいは社会観なりを持っているかということから考えてみましょう。

仏教の中で、早い時代に現れた宇宙観と呼べる素朴な教説は、おそらく須弥山説でしょう。これは、いわゆるエベレストを中心とするヒマラヤの山系が、発想の原点になっているのだらうと思えますけれども、須弥山（スマール）という壮大な山を中心に、その外側に大きな海があり、またその外側を山が囲み、といった形で、合計で九つの山と八つの海からできているのがこの宇宙である、という説です。そして、私どもが住んでいるこの世界は、八つの海の一番外側の海に四つの大陸が浮かんでいて、その南側にある、ジャムブドヴィーパ（ジャムブ樹の島、閻浮提）と名付けられる大陸がこれにあたりとされています。

さらにこの須弥山説をベースにして、いろいろな自然世界についての考え方が展開してきます。その最大化されたものが三千大千世界説でしょう。これによれば、先の須弥山を中心とする宇宙（日月や諸天を含む）は一つの小世界に過ぎない。これが千集まったものを小千世界といい、その小千世界が千集まったものを中千世界という。そして、中千世界が千集まったものを大千世界という。つまり、合計すると結局、千×千×千となり、合計十億の宇宙があるとされるのです。最近の天文学ないし宇宙論では、私どもが知っている銀河系宇宙以外にたくさん宇宙があるとされますが、冥想の実践を通じて直感的に把握された宇宙のイメージの拡大を重ね、それを象徴的に表現したものなのでしょう。ここで詳しく述べることはできませんが、この説を踏まえて、例えば後の天台思想では、一念三千という唯心観が生み出されました。すなわち、私たちの一瞬の心の働きが、その三千大千世界とつながっているというの

です。

もう一つ、違った流れとして注意されるのは、『華嚴経』に示される宇宙観です。ここでは、宇宙の始まりは風の渦である。その風の渦の上に大地が生まれ、その大地の上にまた風が生まれるという形で、ものすごく多くの二重の層があつて、そのもつとも上の大地に大海が生じる。その海の中に大きな蓮華が生えている。その蓮華に包まれた世界が一つの仏の国土である、というのです。空想の所産に過ぎないというお考えもあるかも知れませんが、風の渦が基になるということ、これはやはり注目すべきものではないでしょうか。いわゆるビックバンに通じる、現代科学が捉える宇宙の誕生に通じるような空間の把握が直感的になされていたのでしょうか。

以上のような宇宙観が仏教の中にはございます。しかし、自然に関しては、非常に大雑把な分け方しかしておりません。その代表格が「有情と無情」という枠組みです。このうち、有情というのは生き物のことです。有情の情は心のことですが、意志や感覚までも含めています。まとめていえば、「精神的なはたらきをもつもの」という意味になります。

他方、無情はそういうはたらきがないものということで、植物や石や木や川や山などを指します。ですから、後に大乘仏教が起り、その中から如来蔵説や佛性説が出てきますが、そこでは、有情はすべて仏のいのちとつながっているけれども、無情はそうではない、というのが原則的な見方でした。ところが、日本の仏教になると、明確に無情も成仏すると説かれるようになります。「山川草木悉皆成仏」は、そのことを表す代表的な言葉の一つですが、これには日本人の自然観も関係していると思われまます。

次に、社会に関する見方ですが、これには積極的な議論はほとんど見出せません。仏教の經典の中にも、国家について論じているものはかなりありますが、その多くはいわゆる鎮護国家論に通じる思想です。典型的なパターンは、国を治める国王が立派で、仏教にもとづいて善政を行えば、国は栄え、国民は豊かで幸せな生活ができる、というも

のです。けれども、中にはこれとは別の国王の見方もあります。初期経典の一つに、国王を泥棒にたとえる話が出てくるのは、その一例です。しかし、いずれにせよ、国王と国家と社会が一体的なものとしてとらえられるのが一般的です。

因みに、仏典には、「王法と仏法」という分け方があります。世間、すなわち、社会において規範となる法律一般が王法で、出世間、すなわち、世間を超えた出家者の世界の規範が仏法です。この概念を用いて説明すれば、仏法がそのまま王法となる社会が理想であるということになるでしょう。なお、この問題を空や縁起の思想にもとづいて哲学的につきつめていくと、王法と仏法は別ではないということになります。実際、そういう議論を展開している仏典もあります。今は触れないでおきます。

もう一つ、われわれが住む宇宙をその在りようの時間的変化という側面から捉えた思想に「四劫説」があります。劫とは、サンスクリット語のカルパの訳語で、きわめて長い時間を表す単位の一つですが、宇宙は成劫、住劫、壞劫、空劫の四段階の変化を繰り返すというのです。すなわち誕生して成長し、その後、一定期間安定するが、その後、それは壊れていき、やがて何もなくなる、というのです。つまり建設期、安定期、破壊期、そして空白期の四期を繰り返すのが宇宙だというわけです。現代の宇宙観では、例えば太陽系の宇宙は、五十億か六十億年後には消滅するといわれているようですね。四劫説は、このような宇宙観にも通じているともいえるかもしれません。

因みに、この説では、最後の時には「三災」といいますが、要するに大規模な火災、水災、風災が起き、この大災害によって宇宙が崩壊するとされています。実は、このことを取り上げた興味深い禅宗の問答があります。背景には、その当時、火災が相次ぐなどの社会不安の増大があったのかもしれませんが、宋代の大隋法真という僧に、ある僧が「壞劫の大火災が起き、この世界が消滅するときに、この私というものはどうなるのでしょうか」という質問をします。すると大隋は「一緒に壊れてしまふよ」と答えるのです。

私にはこの話に関して特別な思い出があります。というのは、私が大学院生の頃ですが、立職するとき、つまり、一人前の僧侶となるために首座和尚という役に就いて問答をしなければならなくなったときに、あえて選んで取り上げたのが、この「大隋劫火」の話だったからです。その頃から、宇宙というか世界の有りようというものに関心がありましたし、核保有をめぐるって国際的に不安が高まっていた時期でしたから、禅の立場ではこういう問題をどう受け止めるのが正しいのか、しっかりと考えなくてはならないと思ったのです。

それはともかく、大隋の応答が明確だったことで、私も「それしかないのだ！」と、何かホッとしたのです。あえて説明を加えれば、「自己と世界とを区別してはいけない、ひとつなのだ。その中で生ききりなさい」というメッセージだと思えますけれども、この話が開示していることは、とても大事なことなのではないでしょうか。

だいぶ時間がなくなってしまう。少し駆け足で残りましたお話を見せていただきます。その話の要点は、災害によって失われたのちに私達はどう向き合うべきなのかということです。まず一つは、身近な人たち、例えば、子供を亡くし、夫や妻を亡くし、あるいは深く信頼していた人を亡くす。そうした場合、残された人には、悲嘆にくれるというのか、どうしようもない時期がかならずあるだろうと思えます。しかし、乗り越えていかななくてはいい。それが残されて生きる者の務めでしょう。

けれども、その前に、失われたのちにどう向き合うかです。私は、まず、共に在って、共に生きてきたということ、いわば支え合いの中で生きてきたという、そのことに気づくことが大事だと思います。そのことは、裏返せば感謝をするということでもあります。そういう感謝の思いは誰でも持てるし、持たなければなりません。これが、宗教を信じるか、信じないかにかかわらず、原点にあるものではないでしょうか。この感謝の思いは、宗教的に深まっていきますと、やはり心から悼んで手を合わせる、亡き人のいのちをわがいのちとして受け止めるということだと思います。

次に、社会的な面でいえば、当然のことながら、この大災害がなぜおこったのか、科学的にしっかりと分析し、それに適切に対処する手立てを作っていくことが求められますね。こういったことは、優先順位といますか、これを行っていく上で何が優先されるのか、何を第一にしていきたいのかということを引きちんと考え、その順位に従って着実に選択し、行動に移していく必要があります。

第三には、亡くなった方が何を願って最期の時を迎えたのか、また身近な人たちに普段から何を伝えていたのか、そこにまで思いを深めた上で、いわば亡くなった人たちと共に、一緒にこの社会を作っていく、良い社会を作っていくことが願われます、こういうあり方を、私は「共成」と呼んでいるのですが、共に生きるだけではないのです。共に手を取り合い、何かをしていく。そこまでいってはじめて、本当の意味で「いのちに向き合う」が完成するのではないかと、私は思うのです。

それからもう一つ、残されたものの心の問題があります。これについては、まずは適切な医療上のケアをすることが、いうまでもなく大事ですね。医療といっても、身体的な医療もあるし精神的な面でのカウンセリングももちろんあります。第二には、震災直後のニュース等でもしばしば伝えられましたけれども、安らげる場がどこにあるか、そのことをしっかりと見極め、そういう場所を提供していくことです。例えば、「ご先祖の墓が流されてしまった。それをなんとかしてもはやく復旧したい」という思いを持った方は少なからずいらっしゃったようです。しかし、お墓の再建に国や行政は手を貸しません。身近なお寺も流されてしまっている。何もできない、という状況もたくさんありました。そういう中で本当に安らげる場とは何なのかということですね。これをしっかりと確保することが必要です。

それから、精神科の先生方やカウンセラーの人たち、そして宗教者が一緒に協力、協働するという、こういう横のつながりの場を作るべきではなかったかということです。実際には、宗教者が参加することはなかなか難しい。そこ



で、この点を補うように出現したのが、臨床宗教師です。宗教者を含む協働の場が求められていることは間違いありません。

もう一つ、最後の問題になりますけれども、お互いがいろいろな場を通してのちと心について深く学んでいく機会を多く作っていくことです。そうやって初めて、新たな生、新たに充実感をもって生きることが可能になってくるのではないのでしょうか。

少し予定の時間を越えてしまい申し訳ありません。また後にパネルディスカッションの時間がございますので、何かわかりにくいところなどがありましたら、ご質問をお出しただければ幸いです。ご清聴ありがとうございました。